

茨城県

城里(しろさと)町商工会女性部

空き店舗活用で「エコ生活」発信

商工会(鈴木裕司会長)が空き店舗対策として展開するチャレンジショップの一環として、女性部(仲田とみ子部長)が立ち上げた「響の会」が店舗を借り上げ、運営する「エコ・グリーンショップ『響くひびき』」がオープンした。

持続可能で環境にやさしい「エコ生活」を提案・



発信するため、EM(有用微生物群)を使った女性部員手づくりの「EM廃油せっけん」や生ゴミを堆肥にするためのグッズなどEM関連商品、女性部が積極的に交流してきた茨城大学が企画する

「いばらき地域サステナブルプロジェクト」の情報環境関連の本なども取り揃えた。来店客をもてなすお茶も、太陽光を利用して沸かすソーラーケッカーを使って淹れている。

店名は「心に、地域に、社会に響け」という趣旨でネーミングした。フクロウをモチーフにした町のキャラクター「ホロル」の人形焼も復活し、商工会の遊休施設を活用して手づくりしている天然酵母パン約10種や、シフォンケーキなども販売している。日・月曜日が定休日、営業時間は10〜18時。

仲田部長は「安全・安心な地元素材や国産素材にこだわりました。生ゴミをゴミにしないなど小さなことから始めて、「エコ生活」の輪を広げたい」、また鈴木会長は「空洞化が進む商店街の活性化をめざし、地産地消を進めて地域農業の活性化にも役立てば」と話している。

滋賀県

愛荘(あいしょう)町商工会

高校と就業体験など協定結ぶ

商工会は3月23日、商工会加盟事業者のもとで



高校生が就業体験をすることや、商工会員に学校参観の機会を提供することについて、町内の愛知高校と3年間の連携協定書を交わした。

愛知高校では生徒

の7割以上が就職を希望しており、社会に出る前に仕事を知らたいという生徒の希望もあって、提携の運びとなった。

協定は4月1日から発効し、5月には3年生約60人が40事業所での就業体験に参加した。商工会の松浦敏雄事務局長は参加事業者の拡大を呼びかけており、愛知校側は今後は音楽コースや体育コースの生徒が地域行事に参加するなど、幅広い連携をめざしていく予定だ。

熊本県

天草(あまくさ)市商工会

鯛じゃないよタコ鯛だよ

商工会は、地元特産のタコをあんの代わりに詰めた「タコ鯛焼き」を試作し、3月に兵庫県明石市の駅前イベントで販売したところ、好評を博した。

そこで、4月1日からは、市内有明町の物産館「リップランド」で店頭販売



に乗り出した。九州新幹線全線開業を前に、タコ、タイで有名な明石市と交流したのを記念して商品化したもので、タコと刻みキャベツがたっぷり詰まっている。1個200円で、味はタコ焼きふうのソース味。同時に、すりおろしたじゃがいもでタコを包んだ「タコ汁」も発売し、リップランドの新たな人気商品に。リップランドは3月までは第3セクターで運営してきたが、4月からは商工会員が設立した「天草ありあけ株式会社」が運営している。

長崎県

壱岐(いき)市商工会青年部

今年も交通安全願い、黄色いランドセルカバー贈呈

商工会青年部(山内晋市郎部長)は、5年前から市内の小学校の新入児童にランドセルカバーを贈っている。

今年も山内部長らが市教育委員会を訪ね、かわいいイラストが描かれたランドセルカバー2022人分(市内18校分)をプレゼントした。

新入学児童が交通安全意識を高め、楽しく明るく学校生活を送ってもらいたいと願って始めた商工会の取り組みで、教育委員会では「黄色いランドセルカバーをつけて新入生が通学する姿は、すっきりまちに定着しています」と感謝の意を表している。

群馬県

藤岡市鬼石(おにし)商工会女性部

創立30年で手づくり観光マップ

創立30周年を記念して商工会女性部(萩原幸世部長)が手づくりした観光マップ「上州鬼石がかあ天下マップ」がこのほど完成し、



東京・銀座の「ぐんまちゃん家」や事業所などへの配布が始まった。

「三波石峡」(国指定名勝、天然記念物)や冬桜の名所「桜山公園」、鬼石神社など鬼石の見どころを満載。かわいい手描きイラストや花暦、写真をまじえて部員の事業所やイベントなども紹介している。発行部数は3000部。

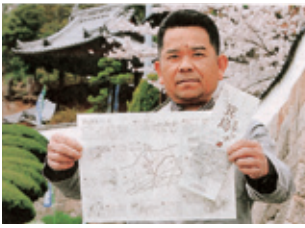
同女性部は、地域振興や豊かなまちづくりなどを目的に、1978年に創立された。全国的に商工会員が減少している中、女性部は昨年9月から11月までに18名増えて93名となり、商工会館で開催した創立30周年の記念式典では、地域振興への決意を新たにしていた。

岡山県

岡山南商工会

スケッチ画の観光パンフを制作

南区妹尾の妹尾観光協会は2009年に観光パンフレットを制作したが、このたび商工会が協力して第2弾の「箕島スケッチ紀行」を制作。同観光協会でも無料配布を始めた。



パンフレットは同観光協会が初めて作った。妹尾版と同じB4判で、蛇腹式の四つ折り。地元・箕島地区の寺社やまち並み、地区に残る自然などを紹介し、地図を中心とした「箕島散策マップ」を掲載している。約30万円で

1000部を複製した。

石垣で築かれた丘にたまたむ呑海寺どんかいじ、古い住宅が残る樋ノ口集落、通称・双子池として親しまれている上池と下池など、16枚の鉛筆のモノクロスケッチ画は、地元在住する画家・堀越克哉さんが描き、同観光協合理事の安井収さんがつづった思い出を交えた文を添えた。

商工会では、「かつてイグサが栽培されていた箕島の田園風景や箕島小学校の運動会なども紹介しました。箕島にはまだ知られていない名所がたくさんあります。このマップを片手に、地元の方もまちを訪れた方も散策を楽しんでいただければ」と話している。

大分県

九重(このえ)町
商工会青年部

「九重四季サイダー」販売を拡大



商工会青年部(原田紀義部長)は県の地域活性化チャレンジ支援事業で「九重四季サイダー」を開発し、2月から町内5店舗の「九重・夢」バーガー」認定店で限定販売していたが、「もっと広めていこう」という声を受けて、4月11日から販売拡大に乗り出した。

「九重四季サイダー」は、町内八丁原の九重森林公園スキー場にある深井戸の天然水を100%使用。九重の四季折々の名所を描いたラベルにも「天然水100%」とあった。330mlの瓶詰め、1本200円。

梅木淳司青年部特産品委員長は、「11日には町内の八鹿酒造で行われた「なしか!祭」でサイダーを使ったカクテルを1杯200円で販売しました。これまでは観光客の集まる場所での販売でしたが、町内の飲食店や旅館、個人商店など約50店舗で売ることになりましたので、特産品として大いに認知してもらえると嬉しいです」と意気込んでいる。



北海道 標津(しべつ)町商工会

どこでもカウモン号、毎日まちを走る



商工会 (藤本靖会長) は4月16日、道内の商工会では初の取り組みとして、野菜、水産加工品、総菜、菓子、雑貨など幅広い商品を積み込んで町内全域を回る移動販売車「どこでもカウモン号」の運行を始めた。

郊外の町民や車を持たず外出に苦労するお年寄りの買い物の不便さを解消し、併せて商店の活性化を図るねらいで、2月に運営組織を設立した。飲食店、雑貨店、家電販売店、標津漁協、精肉店、書店など町内の16店が参加することとなり、2トントラックで月曜から土曜日まで週6日運行。移動ルートを変えながら、町内各地区を週2回ずつ回る。

人口約5800人の標津町は酪農や漁業などの1次産業が基幹産業で、集落が離れており、市街地から最も遠い崎無異地区までは25キロ離れている。郊外に商店はほとんどなく、市街地に住む高齢者も「重たい荷物を持ってなくなってきた」という声が増えてきたことから、移動販売に取り組むこととした。

トラック購入費や運転手の人件費など事業費は924万円で、国や標津町の補助金を活用した。移動販売に参加する事業者は、売上に応じて一定の負担金を払う仕組み。当面、月250万円程度の売上を目指している。

「カウモン号」という愛称は、町内の小学生から募集し、優秀作8作品をもとにした。酪農と漁業のシンボルである「牛」(カウ)と「サケ」(サーモン)を合わせた造語で、商工会のポイントシールの愛称にもなっている。トラックの荷台には冷蔵庫・冷凍庫と商品陳列棚を配置し、乗り込んで買い物しやすいように階段がついている。

初日は午前10時から商工会駐車場出発式を行い、その後、郊外や市街地を回った。さっそく利用した家では、「ちょっとした買い物に便利で、とても助かります。新鮮なものも嬉しい」と喜ぶ声が聞かれた。初日の売上は約4万円。今後は午前中に郊外、午後に市街地を回り、地域の公園や広場に30分〜1時間ほど停車して販売を行う。民家が点在する郊外は戸別に回り、商品の注文も受け付け、次の運行時に届ける。

商工会の北晴男事務局長は「お客さんをお待たせから、攻め」に転じます。買い物物の不便を少しでも解消し、きめ細かいサービスで地域の商店の良さを見直してもらいたい。町民にさらに周知し、多くの人に利用してもらって、さまざまな要望に応えていきたいと考えています」と話している。

富山県 富山市南商工会青年部

地元食材たっぷり「みなみやき」考案



昨年、大山、大沢野細入、婦中町の各商工会合併に併せて発足した青年部(奥井良樹部長)は、会員の一体感を高めようと地元の特産食材をたっぷり使った鉄板料理「みなみやき」を開発した。管内で開かれるイベントの屋台などで販売するメニューとして考案した。

大沢野細入地域で採れた三ツ、婦中産の卵、大山地域で作られたうどん粉などを混ぜ、薄

く延ばして鉄板で焼く。焼き上がったら、ポン酢やラー油を塗って食べる。調理の仕方を見た目は韓国料理のチヂミに似ており、4月16日に開かれた青年部通常総会で試食を行ったところ、もちもちした食感が好評だった。季節に応じて食材を変えることも検討中。

奥井部長は「利益は地域のスポーツ団体や福祉団体などに寄付する予定です。地元への恩返しになりますし、地域の新しい名物として定着すれば、みなみやきを食べた子どもたちが県外に出ても懐かしく思い出してくれると思います。『地元に戻りたいなあ』と思ってくれば最高です」と話している。

岩手県 洋野(ひろの)町商工会

天然ホヤで「ほやラーメン」、お土産にも最適



商工会(下館孝一会長)は、地域資源を生かした町の名物を作ろうと、約1年かけて特産の天然ホヤを活用した「ほやラーメン」を開発した。新たな土産品として定着させ、町産ホヤのさらなる知名度向上をめざす。スキューバが普及する前のヘルメット潜水「南部もぐり」で採取する地元産の天然ホヤに

ホヤ風味の塩味スープに仕上げた。

めんとスープの製造は久慈市の企業などに委託し、ホヤエキスの濃さを変えるなど、試行錯誤を重ねて完成させた。パッケージは町出身のグラフィックデザイナー渡辺富男さん(千葉県在住)がデザインした。

4月20日には町内大野の「グリーンヒルおの」で発表会を行い、5月1〜3日の「おののキャンパス」交流祭で発売を開始した。大野ふるさと公社が販売する地元産の鶏を使ったみそ味「赤鶏ラーメン」と併せ、土産品の定番として町内の道の駅や物産館などでも販売していく。1袋2食入りで950円。